

猫は愛しい

穂高 忍

ほら、何時か“のら太と姫子の対話”の中に出てきていました茶色いトラ猫ちゃんのこと覚えておられますか。あれからはや4年くらい経ちましたから一。いつも窓際に座って網戸越しに外を眺めていた気弱な男の猫(コ)のチャちゃんです。

庭の藤の花がうす紫色に小さな可愛い花をいっぱいつけてスチューペンの房のように垂れ、美しく咲きはじめた日のことです。チャちゃんは天に召されて昇って去(い)きました。

ママさんはチャちゃんの事をすごく愛していたのです。時には7kgもあるずしりと重いチャちゃんを抱え庭に出て早春の陽光を受けて色とりどりに咲き始めた草花と一緒に眺めながら「この花(コ)たちも寒い冬をのり越えて花を一杯つけてくれたのよ、優しい香りわかる。」「そうね、ママよりチャちゃんの方がお鼻がよくきくものね。」などと話しかけ、ずしんずしんと抱き直し、チャちゃんのふわとした丸い頭にそっと頬を当てたのでした。

又、夕餉にはパパさんの座っていた椅子に座らせ、テーブルに向かわせて「チャちゃん、今夜は島根の宗八かれの干物よ、うまく焼けたわ、いい匂いでしょ、一寸待ってね、背中の方の美味しいところを少しあげるからね。」と箸を上げてチャちゃんに目を向け、今度は目をお皿に一。箸を立てて身をほぐしていきます。猫ちゃん柄の小皿にそっとのせ、「さあさあ、お待ちどおさま、

おあがり。」と声をかけます。チャちゃんは太くて大きな手をテーブルにのせ『ああ、旨い、おお旨い』とばかりに大きく口を開けてパク、パクー。口の周りを満足げにペロリ、ペロリと赤くなった舌でなめてママさんの顔に目を向けるのでした。

「美味しかった、今度はママが食べるからね、あなたの好きな窓際に待っていてね。」など会話を交わし、唯一のライフパートナーとして楽しい日を過ごしていたのです。

チャちゃんを失った悲しみは、ママのくしゃくしゃになった顔と眼から溢れ流れる涙を見た時、強く深い情愛を感じました。

しばらくしてママさんは、チャちゃんの事を思い出し思い出し次々と私に語ってくれました。

「それは7年前のことなのです。主人が亡くなってふた七日に友人がお悔やみに来てくださり、看病の日々の事や娘の事を話し、夕方客をバス停まで送り家の前まで帰って来ましたら、一匹の茶色い猫ちゃんが庭を覗き込んでいるのです。

家の前を宅急便の車がブルンブルンと一時停止しブーンと通り過ぎていきました。

「ほらね、この道は車がよく通るから気をつけてよね、前に飼っていたクロちゃんも交通事故でなくしたのよ。だからお庭に入ってもいいけれど、

お水もごはんもあげないよ。」と言って私は家の中に入ったのです。

夕方6時過ぎに娘がお勤めから帰ってきました。

「ただいまー。お母さん、茶色い猫ちゃんが玄関ドアの前にじっと座っているわよ。」と言いますので急いで開けてみるとちょこんと座って私たちを見上げ「ニャーン、ニャーン。」と鳴くのです。「この猫、先程まで庭にいたの、でも飼ってあげられないよって私言ったのよ。」「でも、お母さんこんなに慣れて、何か訴えているみたいだから可愛そうだよ。飼ってやろうよーねー。」と娘が言いました。「そうね、お父さんも入院前に仔猫を飼いたいわって言ってたわね。」

主人が亡くなってふた七日に猫ちゃん(雄)が現れるなんて、何か不思議な出会いのように感じたのです。「そうね、手足を洗って家に入れてやりましょう。」と飼ってやることにしたのです。

お風呂場の後片付けをして和室に入ると、何とチャちゃんは仏壇の前に置かれた紫の座布団の上にじっと座っているのです。私は思わずかけ寄りチャちゃんを膝に抱きかかえました。30余年連れ添った主人の遺影を見ながら、次々とページを捲るように思い出される日々の暮らしがよみがえり、涙が後から後からと湧き出てきました。その時膝に乗っていたチャちゃんが心配そうに縁の黒い眼をしっかりと見開いて私の顔を覗き込み首をぐーんと伸ばして私の頬から流れ落ちてくる涙を丸い頭でぬぐうような仕草をするのです。この猫は私の心がよめたのかしらと思い感じ、又、ぎゅうと抱きしめてやりました。すると体を丸めて力強くゴロゴロと喉鳴らしをするのです。いかにも『僕がお父さんに代わってお母さんを守りますよ。』と話しかけてくれているように思えました。その時、ああお父さんが『寂しがらないで、この猫を可愛がってやっておくれ。』と言ってくれているんだわと、感じたのです。

憔悴しきっていた私の心は段々と落ち着き和ら

いてきたのです。

それ以来毎朝お父さんにお茶とお線香を供えて拜んでいますとチャちゃんも私の横に同じようにちゃんと座って拜んでくれていたのです。本当に利口なのに驚きました。主人を亡くした悲しみもチャちゃんによって救われたのです。

あれから7年幸せな日々が経ちました。娘も嫁ぎ、チャちゃんと二人暮らしになりましたが、「セツセツセの ヨーイヨイ」と手つなぎ遊びなど一緒にして楽しませてくれたのです。又、「だるまさんが転んだ」もやってくれたのです。縁で日向ぼっこをしている私を見つけ、台所から二・三步、歩き出し、私と眼が合うとピタッと止まるのです。私が庭に眼を向けると二・三步進み寄り、私が振り返り「だるまさんが、転んだ。」と言うと、又、ピタリと止まるのです。そして最後の三・四歩のところから一気に膝に跳び乗って来るのです。私は「いい子、いい子。」と言いながら、頭も背中も尾っぽまでなで回してやると、私をもつと喜ばせようとばかりに喉鳴らし音(オン)のトーンを一際高く上げるのです。

とても聞きわけもよい猫で、お留守番もよくしてくれました。私と会話のできるいい子でしたから、もうこのような猫と出会う事はないと思い込み、悲しくて毎晩毎晩一人で泣きました。携帯には未だ今もチャちゃんの写真が入っているんですよー。」

と、眼を赤くして切々と語って下さいました。

不思議な事にご主人のふた七日に現れて、7年後に何とご主人と同じ癌の病で、同じ春の日に最期を迎えたと言うのです。

今はご主人のお墓の近くの動物霊園に眠っているそうです。

この間のお彼岸にはどちらのお墓にもお参りしてきましたと話されました。

ご主人に代わって、ママさんの心の支えとなつて会話をして楽しませてくれたチャちゃんのお話は、これで終わります。